

# さんでんさん

## 二十回生 浅野倉平

子供の頃「佐井寺」(碓井山佐井寺)の事を「さんでんさん」「さんでんさん」と呼んでいましたが、最近では「さんでんさん」と呼ぶことがなくなつた様な気がしています。

我が家には、先代の院主谷光倫さんが、よく出入りをされておられ、近隣の奥様方に御詠歌を教えられていますでしたが、その時には、皆が「さんでんのご院主さん」と呼んでいました。

佐井寺の興りは、天武天皇六年(六七七年)、僧道昭がこの地に草庵を設けたのが始まりで、この草庵は道楽・行基

と相伝され、元禄五年(一六六二年)の記録では、天平七年(七三五年)、僧行基が西の山(行基山)に瑞光を見て、土中より梅檀の十二面観音像を掘り出しました。行基は、この事を時の朝廷、聖武天皇に奏上したところ、天皇は山田大臣を大壇主に命じ、十二面観音像を本尊として、現在の地に七堂伽藍と六十余宿坊を設け「山田寺」と称し建立したのが。現在の「佐井寺」の興りです。

又、寛政八年(一七九六年)寛政十年にかけて京都の町人吉野家為八がプロデュースした、当時の旅行ガイド・ブック「撰津名所圖會」では、佐井寺は次の様に紹介されています。

佐井寺 一名山田寺 佐井寺村にあり。古義真言宗。

本尊十一面観世音 僧正行基感得 赤梅檀  
長三尺七寸。

五衰殿塔 當寺にあり。三重石塔婆なり。御讀經供養の塔なりとぞ。不詳。

地藏堂 同所にあり。むかし此地に光明赫然たり。これを穿ち見るに地藏尊を得たり。即こゝに安置す。出現の地を今地藏塚とよむ。

佐井清水 當寺に水乏しければ、行基菩薩これを祈り給え

霊水滔々として今に涌出す。眼疾を濯へば忽平癒して明なり。

行基山 當寺の西にある。今愛宕といふ。小祠あり。本尊出現の靈地なり。遠近眼下に見えわたりて

風景不斜、絶勝なり。

一本松 行基山にあり。又行基松ともいふ。古松にし

て比類の大樹なり。遠境より鮮に見ゆる。

鎮守 八幡宮・春日明神・牛頭天皇を祭る。當村の生土神なり。例祭九月十七日。

天平七年二月十六日、僧正行基こゝに至り給へば、

赫々たる瑞光あり、即其地を掘らしめ給へば、梅檀香木の大悲の尊像を得得す。これ當寺の本尊なり。速

に此由を奏聞し給へば、詔を得て伽藍を草創し、坊舎六十餘院の梵刹と成り。梵唄御讀經を執行し給ふ二十一

箇寺の其一なり。「捨芥抄」に見えたり。星霜累りて兵火罹り、堂塔坊舎一時に焼土となりぬ。正保四年寺職の僧衆

順、再興の志願空しからず、領主板倉周防候撞鐘を寄付



五 衰 殿 塔



し、銘は京師東寺の長者亮春、これを書す。禁裏御讀經の式は三代實録に見えたり。

「さんでんさん」は「撰津名所圖會」には以上の如く記載されている。

「撰津名所圖會」に「五衰殿塔」と言うものが記載されているが、これは「おかうずめの池」の傍にあり、十坪ほどの所に歴代の御院主さんのお墓と三重石塔婆が並んでいますが、その謂われに付いては江戸時代から不詳（つまびらかならず）とされている。ミステリアスな場所でもあります。ちなみに、五衰に付いては天人五衰というのがあります。天人には寿命がないものと思っていたが、天人にも寿命があり、天人が「死」を迎える前兆として五つの兆しの事を五衰と言われおり、次の如くであります。

えしょうこつし  
衣装垢膩 衣装が垢で油染みる。

てとうかうかい  
頭上華萎 頭上華鬢が萎える。

しんたいしゅうあひ  
身体臭穢 身体が汚れて臭い出す。

えきげかんししゅつ  
腋下汗出 腋の下から汗が流れ出る

からくほんざ  
不楽本座 自分の席に戻るのを嫌がる。

以上が「天人五衰」ですが、「さんでんさん」の「五衰殿塔」も、この様な謂われがあったものと推測しております。

しかしながら、江戸時代にはその謂われは既に不詳（つまびらかならず）とされています。

地名の「佐井寺・お寺の「佐井寺」と紛らわしいので、この際、お寺の「佐井寺」は昔馴染みの「さんでんさん」と呼んだほうが良いのではないかと思っております。